



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第34号 : 特集・吐魯番の歴史と文化 I
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1990, 34, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

— (翻 訳) —

吐魯番の歴史と文化(Ⅰ)

栄新江 著
青木 茂・關尾史郎訳註

【はじめに】

ここに私たちが訳出したのは、胡戟・李孝聡・栄新江『吐魯番』(西安 三秦出版社 一九八七年)の第二章 吐魯番歴史と文化の前半部分である。原書は、第一章 吐魯番地理と物産、第三章 吐魯番的考察と旅游と、この第二章の全三章からなる吐魯番に関する入門・案内書である。第二章はその表題からも明らかなように、新石器時代から一八世紀中頃までの吐魯番地域の政治・文化に関する要領を得た概説となっている。近年、漢文文書をはじめ、吐魯番の阿斯塔那、哈拉和卓両地区の古墓群から出土した各種の文物に関する研究が深化の一途をたどっている反面、その成果の上にたった歴史叙述にはほとんどみるべきものがない。そのなかで、本書の第二章は、政治史一辺倒になりがちな概説が多いなかであって、文化史についても要を得た記述がなされており、加えて出土文物に関する貴重な情報が随所に挿入されている。もちろん日中両国の学問的な環境の違いを思えば、異論や異説もないわけではないが、現時点では最良の概説と言っても過言ではない。

したがってその訳出は、吐魯番出土の各種文物を扱う研究者のみならず、わが国でこの地域の研究に従事するあらゆる研究者にとって意義のあることと、かねてよりひそかに思っていたところ、たまたまこの四月から私の演習に所属することになった青木茂君が魏晉南北朝期の對外政策に関心を抱いているということだったので、春休みを利用してふたりで協力して訳出することにしたしだいである。訳出作業は各自作成した草稿を持ち寄って検討するという方法をとった。また註については、最新の研究など最低限必要と思われるものに限定して、私の責任で付した。私たちの力が及ばず、原書の意を十分に伝えきれていないことを危惧するものである。

なお原書は三人の共著という形になっているが、本文からはこの第二章の執筆者を特定することができなかった。北京の栄新江先生のもとにお手紙で問い合わせたところ、先生ご自身が執筆者であることがわかった。そればかりか、先生からは、訳出の許可と激励をいただくことができた。また西江清高氏(駒沢大学文学部)と本研究会の会員諸氏には、訳注にあたってご教示をいただいた。ここにあらためて御礼を申し上げておきたい。

(關尾)

【凡 例】

1. 本訳註は、『吐魯番』の第二章 吐魯番歴史と文化(二六～八五頁)の全五節のうち、吐魯番出土文物に関わる前半(二六～六八頁)の三節を抄出したものであり、後半(六八～八五頁)の第四節 回鶻高昌和高昌回鶻時期と、第五節 蒙古統治時期については省略した。
2. 原書にある各節の下の小見出しについては、原書に準じて四角で囲んで示した。
3. 原書の本文中に用いられている各種のカッコについては、“”を「」で、《》を『』で示したが、()は原文のままとした。また一部原書の本文中にない註を新たに入れたが、その場合も()で示した。
4. 原書には、本文中に若干の註が()で付されているだけだが、あらたに訳註を巻末に付した。訳

注に引用した史料・文献の略号は以下の通りである。

『文 書』：『吐魯番出土文書』第一冊～ 北京 文物出版社、一九八一年～

「識 語」：池田温「中国古写本識語集録稿」（『三蔵』第一八七、一八八号、一九七九年）

『出土文物』：新疆維吾爾自治区博物館編『新疆出土文物』北京 文物出版社、一九七五年

『新 博』：新疆ウイグル自治区博物館編『新疆ウイグル自治区博物館』講談社・中国の博物館第二期Ⅰ、一九八七年

『新疆考古』：新疆社会科学院考古研究所編『新疆考古三十年』烏魯木齊 新疆人民出版社、一九八三年

『文物考古』：文物編輯委員会編『文物考古工作三十年（1949—1979）』北京 文物出版社、一九七九年

『考古発現』：中国社会科学院考古研究所編『新中国の考古発現和研究』北京 文物出版社、一九八四年

「普查資料」：新疆維吾爾自治区文物普查弁公室・吐魯番地区文物普查隊「吐魯番地区文物普查資料」（『新疆文物』一九八八年第三期〈本誌第三二号、参照〉）

『高昌国史』：嶋崎昌『隋唐時代の東トルキスタン研究—高昌国史研究を中心として—』東京大学出版会、一九七七年

「墓塚考釈」：白須淨眞・萩信雄「高昌墓塚考釈」（『書論』第一三、一四、一九号〈白須の単独執筆〉、一九七八、七九、八一年）

5. 原書では、訳出部分に八枚の出土文物の写真が挿入されているが（三五頁、四三頁、四四頁、四七頁、五五頁、六〇頁、六四頁、六六頁）、訳文でいちいちその挿入箇所を示すことはしなかった。

【第一節 姑師と車師前王国の時期（新石器時代～紀元五世紀中葉）】

◆姑師人 吐魯番盆地を含む天山の東部地区では、かなり早くから人類の活動が見られる。盆地に隣接する哈密県の七角井村一帯には、今から約一万年前の細石器文化の遺跡がある⁽¹⁾。ここはさながら石器の加工場のようで、人々は数平方メートルの範囲から採集して来た硅質岩・石英・燧石（チャート）などを用いて、細石鏃、石鑽、および削器などの打製石器を作った。これは当時の社会が中石器の晩期か新石器の早期の段階にあったことを示している。このような狩猟・牧畜生産に相応する細石器の加工技術は、今から約四千年前の吐魯番県阿斯塔那村の北部や交河古城の溝西の遺跡から出土した石刀・石矛・石鏃では、一層成熟の度を増している⁽²⁾。と同時に、陶器の出現は、既に採集・狩猟を中心とした人々の生活が、しだいに農業・牧畜兼業の社会へと変質していたこと、ならびに彼らが盆地の内部に定住しはじめていたことを物語っている⁽³⁾。

『史記』や『漢書』の記載によれば、天山の東部地区の土着民は姑師人（姑師はのちに、車師と呼ばれるようになる）である⁽⁴⁾。彼らは「廬帳に居住し、水草を逐い、頗る田作を知っていた。牛、馬、駱駝、羊畜を有して、能く弓矢を作つ」⁽⁵⁾た。約二千年前の考古資料は、当時の住民が既に普遍的に彩陶の器皿を使っていたこと、ならびにそれが銅器と、場合によっては鉄器とさえ共存していたことを表わしている⁽⁶⁾。紀元前三世紀以前には、人々は牧畜に従事すると同時に、農業経営を拡大していった。また毛織物や木器の生産、製錬技術なども行なわれるようになった。墓のなかから出土した漆器、絹織物、銅鏡、および貝類などから、この地域と中原地域との間に既に密接な関係と広範な往来があったことがわかる⁽⁷⁾。

◆五度、車師を争う 紀元前三世紀初め、姑師人は東部天山の南北両麓にわたり広範に分布しており、その中心は吐魯番盆地であった。その東方には、長安（現在の西安）に都を定めた前漢王朝があり、西方と南方には、西域土着の城郭国家、そして北方には、「控弦の士、三十余万」⁽⁸⁾を擁する匈奴があった。当時匈奴は最強の勢力を誇っており、連年のように漢の北辺に侵入したのみならず、蒲類海（現在の巴里坤湖）を根拠地にして、西辺

の日逐王の下に僮僕都尉を設け、焉耆、危須、尉犁などから賦税を徴収して、西域諸国を役使していた⁽⁹⁾。吐魯番盆地はこのような匈奴が西域へ進出する際の通路で、食料の供給地にあたっていた。

漢は成立後七十年余は国力の回復に努めていたが、武帝が即位すると、匈奴に対する反撃が開始された。武帝は正面から攻撃をかけたほか、張騫を西域に派遣し、西域諸国と連合して匈奴の「右臂」⁽¹⁰⁾を断とうとしたのである。河西四郡を列置し、二関を設けて河西回廊に安定した足場を固めた漢は、匈奴と西域地方を争ったが、争奪の焦点となったのは、車師人のいた吐魯番盆地であった。前漢時代、漢と匈奴は車師をめぐる五度にわたって戦いを繰り返したので、これを史上「五たび、車師を争う」⁽¹¹⁾と言う⁽¹²⁾。

漢の天漢二（前九九）年、武帝は匈奴から降ってきた介和王に開陵侯を授けて楼蘭国の兵士を率いて車師を撃たせた。これに対して匈奴が右賢王に数万の騎兵を率いて車師の救援に赴かせた結果、漢軍は敗退した。これが第一回目の対決である。征和四（前八九）年になると、武帝はまた開陵侯に楼蘭、尉犁、および危須など六国の兵士を率いて車師を討伐させたので、車師王は漢に投降してきた。これが第二回目の対決である。昭帝年間には、匈奴が再び車師を占拠し、四千の騎兵を派遣してこの地で屯田を行なった。本始三（前七一）年には、宣帝が五人の将軍に一五万の兵士を率いさせて、別々のルートから匈奴を攻めさせた。盆地で屯田していた匈奴はこれに恐れて逃走してしまったため、車師はまたあらためて漢と通じるようになった。これが第三回目の対決である。しかしその後匈奴の圧力によって車師の太子烏貴が王になると、匈奴と婚姻を結び、漢が烏孫に派遣した使節を襲撃するに至った。これに対し地節二（前六八）年、漢は將軍鄭吉をして再度車師の交河城を攻略させた。しばらく緊張が続いた後、車師王は烏孫に逃走し、漢の兵士が三百人ばかりこの地に留まって屯田した。これが第四回目の対決である。吐魯番は土地が肥沃なために、匈奴にとっては垂涎的であり、頻りに騎兵を使って襲撃して来た。そこで漢はやむをえず、元康四（前六二）年にこの地を放棄した。しかしまもなく匈奴で内乱が起こり、西辺にあった日逐王は神爵二（前六〇）年にその民を率いて漢に降ってきたので、車師の地もそれとともに漢に帰属することとなった。「僮僕都尉はこれによって罷められ、匈奴は益々弱くなって、西域に接近することはできなかった。」⁽¹³⁾これが第五回目の対決である。ここに至って、漢の勢力はついに吐魯番盆地に足場を固めたのである。

◆車師前王国

匈奴が投降してきたので、漢は車師の地を支配下に入れることになった。早くも神爵二年には、その地を「分けて、車師前・後王、および山北の六国とし」⁽¹⁴⁾て、元来車師人の領域だった地域を自然の地形に基づいて八つの国に分けてしまった。分割して統治することがその目的だった。このうち、車師前王国が吐魯番盆地を支配した。これより、吐魯番盆地は名実ともに一つの独立王国として歩み始めることになったのである。

車師前王国はまた車師前部とも呼ばれ、都城は交河城（現在の交河故城）に置かれていた。この交河城なる名称の由来は、「河水が分流して城下をめぐるにいたこと」にあり、「そのために交河と呼ばれた」⁽¹⁵⁾のだが、今なお当時のたたずまいを残している。車師王の下には、侯、将、都尉、君など各種の官吏が置かれていた。前漢時代には、その戸数は七〇〇戸で人口は六〇五〇人、うち兵士は一八六五人であった。後漢時代には戸数一五〇〇戸余、人口四〇〇〇人余、兵士は二〇〇〇人に上った。また土着の車師人以外にも、その国内には屯田に従事する漢族がいた。前漢の元帝初元（前四八）年、漢は車師前王国に戊己校尉を設け、高昌壁（現在の高昌故城）に駐屯させた⁽¹⁶⁾。戊己校尉は数百人の兵士を率いてこの地で屯田を行なったのである。

しかし車師前王国が漢の戊己校尉の保護下に平穏でいられた期間は、長くはなかった。王莽が漢を篡奪すると、西域諸国が次々に反旗を翻して、戊己校尉は殺され、匈奴の勢力がまた吐魯番盆地を占拠したのである。後漢の明帝永平一六（七三）年ようやく漢は伊吾廬（現在の哈密）を奪取し、車師は再び漢に附くことになった。その後幾度か変化はあったものの、北匈奴の西遷にともなって、車師前王国は基本的に漢・魏の戊己校尉の鎮撫下にあった。漢族の屯成兵は増加の一途をたどり、屯田もしだいに広範囲に開かれて、中国内地、とりわけ河西地方から移住してきた漢族のなかには、土着

の車師人に混じって生活する者もあり、魏・晋の頃には、盆地内に「高昌土兵」⁽¹⁷⁾と呼ばれる存在が出現した。これは車師人と屯田の開発に従事していた漢族とが連合して組織された地方軍である可能性が高い。西晋が滅亡すると、涼州は独立し、張駿は咸和二（三二七）年に「叛将」⁽¹⁸⁾の戊己校尉趙貞を捕え、高昌はここに屯田を擁する前線区域から発展して郡となったのである。これによって盆地の東部は前凉の高昌郡の管轄地、盆地の西部は交河城を中心として車師前王の統治下に入ることとなった。高昌郡はいくたびかその支配者がかわったが、車師国はこの間も一貫して独立を維持していた。しかし北凉の殘党沮渠無諱・安周兄弟の高昌占拠後、ついに承平八（四五〇）年に安周が柔然の協力を得て、交河城を攻め落とし、車師王の車伊洛とその子歇が東方北魏の都、代に落ち延びて、車師前王国は滅亡したのである。

◆戊己校尉

前漢の元帝初元元（前四八）年の戊己校尉の設置は、吐魯番の歴史上の一大事件である⁽¹⁹⁾。なぜならば、それは中原からこの地にやって来た漢族がそこに定住し、土着の車師人と共同で生産と生活を始めたことを意味するからである。

戊己校尉の基本的な職務は、屯田開発と食糧生産であり、西域にあった漢の軍隊とここを通る漢の使節に対して食料や飼料を提供することにあった。と同時に、戊己校尉は烏壘（現在の輪台）に駐留していた西域都護を助けて北方の匈奴に対抗し、西域諸国を安撫して、シルクロードの滞りない交通を確保しなければならなかった。それでは、これがどうして「戊己校尉」と呼ばれたのであろうか。それは、漢代の人々が五行方位説を信じていたからである。すなわち十干のうち、甲乙、丙丁、庚辛、壬癸をそれぞれ東西南北に配した結果、戊己だけはそれ以外に仮託せざるをえなかったからである。戊己校尉も車師前王国の屯田校尉のもとに治所を求めたので、このように称することになったのである⁽²⁰⁾。前漢時代、戊己校尉の治所は高昌壁にあり、はじめはこの戊己校尉ひとりだけだった。しかし成帝年間になると、状況に応じて戊校と己校に分けられ、その後も時に応じてこのような体制がとられた。その治所は基本的に高昌壁に置かれたが、後漢の初めには一時柳中城（現在の魯克沁）に駐留したこともある。

戊己校尉は漢の軍隊を率いて車師前王国の屯田にあったので、ここに中原の先進的な生産技術と文化がもたらされた。そのためこれ以後、高昌城を中心とした盆地の東部地域は、交河城一帯よりも早く発展を遂げた。三国時代と西晋の末期に中原が大乱に見舞われた結果、河西地区の大族がこの地に移住して来た。したがって魏・晋以後の戊己校尉も河西の大族から任じられることが多くなって、高昌地区はしだいに涼州の地方官のもとに属することになり、郡の規模と郡としての各種の軍事・政治制度を整えてゆくのであった⁽²¹⁾。

【訳 註】

- (1) 『新疆考古』、二七頁、『考古工作』、一七〇頁、参照。
- (2) 『新疆考古』、三三～三八頁、『考古工作』、一七〇頁、『考古発現』、一八八頁、「普查資料」、一～三頁、参照。
- (3) 新疆出土の彩陶については、陳戈「略論新疆的彩陶」（『新疆社会科学』一九八二年第二期）、王炳華「新疆出土彩陶」（『新疆社会科学』一九八六年第四期）、参照。また『新博』、図版一～一一（解説は一五八～一六三頁）に写真がある。
- (4) 姑師（車師）の歴史と民族については、嶋崎昌「姑師と車師前・後王国」（『高昌国史』、所収）、参照。
- (5) 『後漢書』卷九六西域伝蒲類国条。
- (6) 『考古工作』、一七一頁、「普查資料」、一九～二二頁、参照。なお新疆出土の青銅器については、王炳華「新疆地区青銅時代考古文化試析」（『新疆社会科学』一九八五年第四期）、参照。また『新博』、図版二五～三〇（解説は一六六～一七〇頁）に写真がある。
- (7) 『考古工作』、一七一～一七二頁、「普查資料」、一九～二二頁、参照。吐魯番盆地における近年の調査では、鄯善県蘇巴什古墓から、漆器や貝（吐魯番地区文管所「新疆鄯善蘇巴什古

墓葬」(『考古』一九八四年第一期)が、吐魯番県艾丁湖古墓からは、銅鏡(同所・新疆維吾爾自治區博物館「新疆吐魯番艾丁湖古墓葬」(『考古』一九八二年第四期)が、それぞれ出土している。なお新疆出土の当該時期の絹織物については、『新博』、図版三二(解説は一七一～一七四頁)に写真がある。

- (8) 『漢書』卷九四匈奴伝。
- (9) 僮僕都尉については、松田壽男「匈奴の僮僕都尉と西域三十六国」(『松田壽男著作集』第二卷・遊牧民の歴史 六興出版、一九八六年、所収)、参照。
- (10) 『漢書』卷六一張騫伝。
- (11) 「五争車師」、およびこれに類似した表現は、安作璋『兩漢と西域關係史』(濟南 齊魯書社、一九七九年、第三章)や、孟凡人「車師後部史研究」(同氏『北庭史地研究』烏魯木齊新疆人民出版社・中亜文化研究叢書、一九八五年)などに見えている。
- (12) 以下、車師をめぐる漢と匈奴の抗争については、嶋崎昌「匈奴の西域支配と兩漢の車師経略」(『高昌国史』、所収)、池田雄一「前漢時代における西北経営と匈奴対策」(『中央大学文学部紀要』第一一六号、一九八五年)、参照。
- (13) 『漢書』卷九六西域伝総序。
- (14) 『漢書』卷九六西域伝総序。姑師分割に関する最近の成果に、孟凡人「略論山北六国与車師六国」(同氏、前掲『北庭史地研究』)がある。
- (15) 『漢書』卷九六西域伝車師前国条。
- (16) 侯燦氏は、高昌壁の所在を高昌故城北方の勝金口に求めている(同氏「(要旨)漢代の高昌壁について」(本誌第五号、一九八九年)、参照)。
- (17) 「高昌土兵」については、唐長孺「魏晋時期有關高昌的一些資料」(同氏『山居存稿』北京中華書局、一九八九年、所収)、参照。
- (18) 『晉書』卷八六張駿伝。
- (19) 戊己校尉に関する近年の成果として、侯燦「漢晋時期的西域戊己校尉」(『西北史地』一九八三年第三期)がある。
- (20) 戊己校尉の名称の由来については諸説あり、榮氏の説はそのうちの一つにすぎない(伊瀬仙太郎『西域経営史の研究』日本學術振興会、一九五五年、第一章第一節、参照)。
- (21) 高昌壁から高昌郡へ至る過程については、唐、前掲「魏晋時期有關高昌的一些資料」、参照。

■ 紹介 『駿台史学』第七八号(新出土文書による中国古代史研究特集号)
一九九〇年二月に刊行された本号には、戦国・秦漢時代の簡牘やトゥルフアン文書を扱った計七篇の論稿が掲載されている。
このうちトゥルフアン文書を扱っているのは、①町田隆吉「使人と作人—麴氏高昌国時代の寺院・僧尼の隷属民—」、②石田勇作「吐魯番出土「舉錢契」雜考」、および③竹浪隆良「唐西州高昌県処分田畝案卷」について」の三篇である。これらは、①が文書に見える使人と作人の性格から高昌国時代の身分制を論じ、②が表題の形式を有する文書から高昌国時代から唐西州時代にかけての貨幣経済の趨勢を見通し、そして③が表題の文書に対する徹底的な分析をふまえ、唐代の文書行政や家族制度のあり方を論ずるというように、まことに多彩な内容になっており、文書研究の豊かな可能性を提示している。また③では、表題の文書の現代語訳が付されており、利用者に多大な便宜を提供してくれるほか、①では高昌国に固有の問題を論じながらも、絶えず同時代の中国との異同に配慮がなされている。それぞれの結論には異存もありえようが、このように、方法や視角といった面でも、三篇の論稿から学ぶべきことは決して小さくない。(N)

【「敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成」補訂－「永安元年八月韓治陶罐銘」について－】

本誌第29号に掲載した關尾・町田隆吉編「敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成－附、書道博物館所蔵三世紀陶罐銘－」（Ⅱ）中、Ⅸの事例は北涼ではなく、西晋の誤りでした。編者の不注意による誤りを深くお詫びするとともに、表題を以下のように訂正し、註2)を削除させていただきます。

Ⅸ 西晋永安元（三〇四）年八月韓治陶罐銘 (82M40出土 朱書・行数不明 〈録〉北大、六二九頁)

なお西晋では三〇四年の七月庚申（二五日）に永安から建武と改元し、同年十一月丙午（二二日？）に再び永安が復活しています（翌一二月には、さらに永興と改元）。したがって本来ならば、永安元年八月という紀年はありませんが、干支が合致するほか、北大によれば、当陶罐が出土した新店臺四〇号墓は、早期の形式を有しており（北大、六三三頁）、しかも銘文中の「大男」は、吐魯番出土の「西晋泰始九（二七三）年二月翟姜女買棺券」（66TAM53出土 〈写〉『出土文物』、図版四二 〈録〉「墓塚考釈」Ⅰ、一九〇頁）に見える「大女」という表現に匹敵する比較的古い書式であることなどから、三〇四年と判断できます。

したがって永安から建武への改元は翌月になっても敦煌へは伝達されていなかったようですが、改元後わずか二週間足らずであり、さらにこの時期がいわゆる八王の乱の最中であれば、中央からの情報伝達が円滑を欠いていた可能性も十分に考えられます。しかしそれではこの後、敦煌を含む涼州で建武なる元号が用いられたのか、という問題がありますが、これについては否定的に考えるべきだと思います。

そもそも建武と改元された三〇四年の秋は、成都王穎が皇太弟として実権を掌握していた時期に当たり、七月には恵帝が鄴に拉致されるという事件が起きています。改元はその直後（同日？）に行なわれています。したがってこの改元が成都王穎の主導によって行なわれたことは疑いなく、十一月の改元＝永安の復活は、河間王顥によって恵帝が長安に拉致された後、洛陽の留台によって行なわれたものです。一方涼州刺史だった張軌は中央におけるこのような事態に対して、「河間・成都二王の難に及んで、兵三千をして東のかた京師に赴かしめ」（『晋書』巻八六張軌傳）ています。張軌は成都王穎や河間王顥の専横に対して恵帝擁護の立場を堅持するのです。この点を考慮すれば、たとえ改元の情報が涼州にももたらされたとしても、彼がその管内に向けて建武なる元号の使用を指令したかどうかは、はなはだ疑わしいと言わざるをえません。むしろ、中央における頻繁な改元にもかかわらず、恵帝擁護の立場からこれに従わず、一貫して永安を用い、敦煌の豪族社会がやはり尊王の立場からその方針を支持したと考えることも十分に可能です。のちに前涼政権が樹立されると、東晋成立後も半世紀近くにわたって、西晋最後の建興なる元号を奉用し続けるのも、あるいはこのような姿勢と無関係ではないかもしれません。

以上、この小文では前稿の誤りを訂正し、敦煌新店臺四〇号墓出土の陶罐の紀年である永安元年が三〇四年に比定されること、つまりこの元号は西晋のそれであること、ならびに、実在しないはずの永安元年八月という紀年も、涼州においては用いられていたと考える根拠が充分にあることを述べました。

（關尾史郎）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川 正 晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)